『歌姫あるいは闘士　ジョセフィン・ベイカー』

荒このみ著
講談社　二〇〇七年六月

このところ毎年正月は、実業団と大学の駅伝を楽しみに見ている。今年もそうだったが、区間新記録とか一五人ものゴボウ抜きといった快走を達成するアフリカ、とくにケニア出身のランナーたちにはいつも感嘆させられる。また、日本にかぎらずオリンピックや世界陸上などで活躍する短距離ランナーたちも、だいたい黒人選手ばかりである。こと「走力」に関しては、私たちアジア人はもとよりヨーロッパ・アメリカ系の白人も絶対にかなわない。おそらく先天的な素質の違いによるものなのだろう。だから、人類はアフリカで誕生し、この最初の人類が驚異的な脚力をもっていたから、徒歩で地球各地に散らばることができたのだという学説に、新年を迎えるたびに賛成したくなるのかもしれない。

著者の近著『歌姫あるいは闘士　ジョセフィン・ベイカー』を一読してまず感じるのも、やはり「走力」「脚力」の違いということである。ただしこの場合に問題になる「走力」は、陸上競技のフィールドやロードではなく、歴史、そして世界という地球規模のはるかに広大な舞台で発揮されるものである。

本書の主人公ジョセフィン・ベイカーはアメリカ・ミズーリ州セントルイスの貧しく不幸な家庭に生まれ、ローティーンのころから故郷のクラブでダンサーをやったり、ニューヨークの黒人ダンスの「エンド・ガール」と呼ばれる「おどけ役」ですこしは知られていたが、一九二五年、一九歳のときにパリに行くチャンスに恵まれ、抜群の身体能力と姿態のエキゾティックな美しさを誇示する「ダンス・ソヴァージュ（野性の踊り）」のヌード・ダンサー、そしていくつものヒット曲を歌うシャンソン歌手として一挙に大スターになった。当時「黒いヴィーナス」と称されたベイカーの絶大な人気のことは、あの謹厳なボーヴォワールでさえ、『回想録』で興奮して書いているほどである。

なにかの特別な才能のある外国人には比較的寛大なフランスで、黒人であっても人種差別されなかったベイカーは、こうして精神的に解放され、人間としての尊厳を取りもどした。そして三〇年代にはフランス語読みの「ラ・バケール」に変身して名声を博し、ヨーロッパで「アメリカン・ドリーム」のひとつたる巨万の富を築き、推理小説家のシムノンら何人もの男性たちと浮き名を流したあと、献身的なフランス人と何度も結婚してフランス国籍を取得した。四〇年代に入るとナチス・ドイツにたいするレジスタンスに決然と参加して、その功績でのちにレジスタンスの英雄ドゴールからレジオン・ドヌール勲章をもらっている。両大戦間のフランスでみずからの意志と力で勝ちえた成功に自信をもち、裸で勝負した「歌姫」は、今度は素手で戦う「闘士」にもなったのである。

とはいえ、「黒いヴィーナス」がさらに「闘いの女神」にな

らざるえなかった真の理由は別にあった。五〇年代に再帰国して十年まえと同じような屈辱的な経験をさせられた、いつまでも頑迷な黒人差別をつづけて平気な母国とのきわめて複雑かつ困難な関係のせいである。ベイカーはある種の義侠心から冷戦下のアメリカ政府に果敢に挑戦し、ＷＡＳＰ中心のアメリカ社会を公然と敵にまわすことになるのだが、ここでも彼女の「走力」が物を言うことになる。当時業界に絶対的な権威をもち、なんと四八年間もＦＢＩ長官をつとめたフーヴァーら政界の上層部とも繋がっていたコラムニスト、ウォルター・ウィンチェルの偽善的な振る舞いに単身敢然として闘いを挑むばかりか、アルゼンチンのペロン、キューバのカストロ、ユーゴのチトーらにも直談判して正真正銘の黒人解放の大義を訴えた。たんなる芸人ではなく、政治的自覚、さらには社会的な使命感さえもったスターだったのである。

これと同時に、人種差別のない世界という彼女の夢の実現であった南仏サルラ近くの「レ・ミランダ城」の運営、そこにおける世界各地の戦争孤児の養育・教育をおこなうために数かぎりない公演や講演をして働きつづけた。そのために、一九五四年には来日し、ふたりの日本人孤児というか、いわゆる「占領軍ベイビー」を養子にしている。いずれにしろ、この「闘いの女神」に変身した「黒いヴィーナス」のほとんど無謀とも言える、めざましい活動が、やがて六〇年代のアメリカ公民権運動のパイオニア的な役割を果たしたことは、もしかするとアメリカで初の黒人大統領が誕生するかもしれないといったように、状況が変わってきている今日特筆に値するだろう。

しかしながら、六〇年代後半から七五年の死にいたる晩年にはひたむきな「走力」だけでは解決できない問題に遭遇した。あまりにも楽観的かつ自己中心的な放漫経営がたたって破産したために、心の拠り所であった「レ・ミランダ城」をついに手放さざるえなくなり、素朴・正直すぎたアフリカン・アメリカンの娘の切ない夢が呆気なく消え失せてしまうからである。また、いくら「不死身のスター」といっても、やはりいつか死は訪れる。しかし、それはやや若すぎはしたが、ある意味で「幸福な死」だったのかもしれない。なぜなら、芸能生活五十年を記念するパリのボビノ劇場での最後のステージは大盛況になり、そのさなかにスターとしての栄光を保ったまま、ほとんど舞台上の死に近い死を遂げたのだから。

本書は、以上にその上っ面だけを駆け足で略述したような、類い稀な黒人大スターの生涯を二〇世紀の世界史に関わる興味深いエピソードをもふんだんに取り混ぜながら辿っている。画家の藤田嗣治、エリザベス・サンダース・ホームの主宰者澤田美喜、シャンソン歌手石井好子らとの交友と協力、「レ・ミランダ城」を手放したあと孤児たちを引き取ってくれたモナコ大公妃グレース・ケリーとの感動的な友情、ベイカーの国際的な名声を政治的に利用した政治家ペロン、カストロ、チトーらの狡猾さとケチぶりなどは、私たちが初めて知る面白いエピソードの好例であろう。

ただなんと言っても最大の驚きは、大磯からハバナまで、アメリカ各地からフランスのパリ、サルラまでと、地球を股にかけた感のある著者の粘り強く徹底的な調査ぶりである。とりわけ合衆国にとって「危険人物」となったこのアフリカン・アメリカンの国際的有名人をどこに行っても厳重に監視していた

記録であるＦＢＩファイルのスリリングな解読は、本書の圧巻であり独自の功績だろう。このことにより、本書は不出世の「歌姫」の評伝という性格を失わないまま、アメリカ現代史の暗い断面を意外な角度から切り取ることに成功し、人道的理想主義の「闘士」としてのジョセフィン・ベイカーが桁外れの「走力」で駆けぬけ、ときには先駆的にゴボウ抜きにした二〇世紀アメリカ人の人種意識に関する、優れた文化・社会論になりえていると思われる。すでに発表されている『西への衝動――アメリカ風景文化論』、『黒人のアメリカ――誕生の物語』、『アフリカン・アメリカンの文学――「私には夢がある」考』、『アフリカン・アメリカ文学論――「ニグロのイディオム」想像力』に引きつづく本書は、著者の長年にわたるアメリカ研究に国際的な広がりをもたらし、新たな展望を切り開く達成だと言えるだろう。

（西永良成）